
日本人間関係学会ニュース 第 90 号 発行日:2017.6.8

News No.90 Japan Association of Human Relations June 8, 2017

発行：日本人間関係学会 広報委員会 E-mail: tanikawa@kusw.ac.jp 関西福祉大学 谷川和昭研究室
事務局：〒333-0831 埼玉県川口市木曽呂 1550 番地 埼玉学園大学人間学部心理学科 杉山雅宏研究室
FAX: 048-299-1111 E-mail: jahrijimukyoku@gmail.com

[内容] ☆大会委員長挨拶 ☆特集『人間関係ハンドブック』出版記念① ☆人間関係学探訪⑥ ☆事務局だより

《大会委員長挨拶》

第 25 回 全国大会 を 2017 年 11 月 18 日 (土)、19 日 (日) に開催！

大会委員長 勅使河原 隆行
(千葉商科大学准教授)



第 25 回大会は、千葉縣市川市の千葉商科大学にて開催されます。会場の千葉商科大学のある千葉縣市川市は、東京駅から快速列車で 20 分、羽田空港や成田空港からもアクセス良好です。また千葉

県には美味しいものや、全国的にも有名なテーマパークもあります。是非、皆さん千葉でお会いしましょう。

ところでなぜ千葉商科大学で開催することになったのかというと、第 23 回大会（熊本大会）の時に小山理事長から、千葉商科大学で全国大会を開催できないかと打診をいただきました。実は、私のゼミ（通称、勅使河原軍団）では、返事は「Yes！かハイ！か喜んで！」と答えるべし！ということをもットーとしており、まずはどんなことでもプラスから入り、どうしたら相手の意向に沿うことができるのかを考えるということを基本にしています。このような背景もあり、小山理事長にはその場で「Yes！」と答えました。幸いにも千葉商科大学では、他の学会の全国大会をいくつも開催しており、教職員ともに学会開催のノウハウがありますので、今回もおもてなしの精神とともに、精一杯頑張りたいと思います。

さて、今回の全国大会では、いくつか新しい試みを取り入れる予定です。一つ目は、ポスター発表の実施です。これまでの研究発表や実践報告は口頭での発表のみであったため、限られた時間の中では、どちらかというと発表者が一方的に話をしているこ

とが多く、他の参加者との議論をする機会があまりありませんでした。その点、ポスター発表では、より多くの方とご自身の研究成果に関して議論をしていただけたと思います。さらには、口頭での発表では緊張してしまう方にとっても、少し気軽な気持ちで発表ができると思っています。

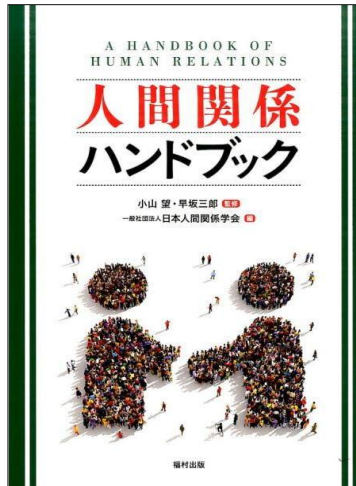
二つ目は、台湾の国立中正大学の呉啓新先生をお招きして、国際学術交流を開催する予定です。台湾では人口に占める 65 歳以上の割合が 21%以上のいわゆる「超高齢社会」が間もなく訪れ、同時に少子化問題も進行しており、日本が経験してきたことが台湾でも起こる見込みです。労働人口も減り、働く環境にも変化が生まれ、人間関係にも影響してきます。日本と台湾は共通点も多いので、呉啓新先生と一緒に様々な議論が出来れば良いと思っています。そしてこのご縁をきっかけにして、今後は台湾でも学会を開催できれば良いと思っています。

そして三つ目は、懇親会を学内で実施し、メニューに関しても単なるケータリングではなく、学生が考案した復興支援メニューなどの提供を考えています。懇親会も、広い意味で人間関係に関することだと思いますので、こちらにも是非ともご参加をお願いいたします。

正式な大会スケジュールや、研究発表の申し込み等については、後日、改めてご案内いたしますので、よろしくお願いいたします。

皆様と千葉でお目にかかれることを楽しみにしております。

特集『人間関係ハンドブック』出版記念①——編集委員のメッセージ



1993年の創設以来、25年目を迎える一般社団法人日本人間関係学会の研究成果の一端が、『人間関係ハンドブック』として2017年3月に福村出版から発刊の運びとなりました。今回の出版を受け、広報委員会では学会ニュースで特集を組むこととしました。特集は今号（第90号）と次号（第91号）の2回に分けて行います。

今号では、2つことを記事といたします。1つは本書の「目次・概要」の紹介を行います。もう1つは本書の生みの親である編集委員会の先生方からのメッセージです。編集委員を担われ、本書の企画・構成に力を尽くされたのは小山望先生、早坂三郎先生、川村幸夫先生、占部慎一先生、三好明夫先生、山本克司先生、森千佐子先生、以上7名の先生方でした。先生方には発刊前や発刊後のトピックやエピソードなどを紹介いただきます。

なお、次号では、各章の編集責任者や分担執筆者のメッセージをお送りできればと準備をしています。

目次・概要

総頁280頁に及ぶ本書は、全9章で構成されています。各章の概要は次のとおりです。

第1章 人間関係の基礎的諸理論

人間関係に関する基礎理論や基本的人権、異文化、文学における人間関係について概説されています。

第2章 人間関係の心理

自己理解や他者理解、対人関係の心理、家族・職場、地域の人間関係に関して、心理学的見解から概説されています。

第3章 人間関係の発達

乳幼児から老年期までの人生のライフサイクルにともなう人間関係の心理について、発達心理学的見解から概説されています。

第4章 教育と人間関係

学校教育の領域（就学前保育、小学校・中学校・高校・大学）における人間関係的な視点を取り上げ論述されています。

第5章 福祉・医療の分野における人間関係

乳幼児から高齢者、障がい者などへの福祉的支援について、人間関係的な視点を取り上げ具体例に基づく論述を行う。また医療分野におけるさまざまな問題（がん、グリーフケア、ターミナルケア、アルコール依存など）の実践例を取り上げて、人間関係を中心とした支援について論述されています。

第6章 地域における支援活動

地域社会におけるコミュニティづくり、地域における人間関係づくりの実践などを報告されています。

第7章 人間関係の改善に関するカウンセリング的アプローチ

心の問題や人間関係の修復・改善などに関するカウンセリング諸理論の紹介とともに、具体例をもとに実践や理論を報告されています。

第8章 被災地における人間関係のアプローチ

東日本大震災の各被災地での人間関係づくりなどを含む学会員の支援活動の様子を、実践例をもとに報告されています。

第9章 人間関係士

本学会の人間関係士の概要を現状と今後の展開を含め報告されています。

編集委員のメッセージ

埼玉学園大学大学院教授・本学会理事長 小山望先生（監修者）+++++

現代は都会や地方にかかわらず、人間関係が希薄になり、対人関係が苦手な方も多く見受けられます。近所での家族同士の付き合いは減り、かつては子育ての一端を担っていた地域社会もお互いさまと助け合って子どもを育てていた機能が低下しています。一方、家庭や職場、地域において人間関係に関するトラブルが報道などで目にする機会も増えています。このような時代だからこそ、情緒的な交流を大事にした人間関係の回復や修復が求められていると思います。

本学会は教育、福祉、医療、産業や地域社会、そして被災地で、失われた人間関係の回復や支援を試行錯誤しながら積み重ねてきました。会員の日頃の実践活動や経験の知を集大成し作り上げたのが本書です。

ところで学会が出版物を刊行するのは、佐藤啓子元会長の2004年の現代のエスプリの「人間関係カシリーズ：人間関係の危機と現実」以来13年振りです。本書は人間関係士の養成講座のテキストとしても活用するが狙いであり、様々な分野の専門家である会員41人に執筆していただきました。執筆いただいた先生方には、厚く御礼申し上げます。また私の企画意図を真摯に受け止めて共に監修に携わっていただいた早坂三郎先生には心から御礼申し上げます。さらに杉山雅宏、永野典詞、山本克司、占部慎一、三好明夫、森千佐子、田中康雄、河合高鋭、杉本太平の各先生にはご多忙のなか、編集の労をとっていただき、この場を借りて感謝申し上げます。

本学会では「人間関係士」という資格制度を作り上げ、資格の普及に力をいれてきました。現在までは「人間関係士」の一つだけでしたが、今後は「人間関係士(初級)」、「人間関係士(中級)」、「人間関係士(上級)」などに分けて、段階的に資格を取得できるように検討しております。

会員の皆様には、是非、本書を手にとりいただき、たくさんのご意見、ご感想をお寄せいただければ幸いです。

甲子園短期大学教授・本学会副理事長 早坂三郎先生（監修者）+++++

平成29（2017）年3月に、念願の「人間関係ハンドブック」が発刊しました。各担当ご執筆の皆様、就中、各章の編集責任者の皆様、そして発刊に至るまで様々にご検討頂きました常任理事はじめ編集委員の皆様にはご苦勞をお掛けしました。改めまして、この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、いついかなる時代、そしてどの地域でも生きとし生けるものは群れをなし、生活を営んできています。人類も同じことで、群れることを本性として家族、仲間、地域の中で、そして集団や組織を形成し維持する過程で、よりよく生き文化の創造と発展につなげてきました。従って、今日の集団の構成単位としての家族・学校・企業をはじめとする組織並びに地域社会における人間関係とコミュニケーションが、社会と文化の生成と展開をもたらしてきたと考えることができます。しかし、少子化や核家族化などにより、コミュニケーション及び人間関係構築の経験と理解の機会が乏しくなり、孤立や攻撃的衝動を抱きやすくなって様々な現象や問題の原因となっています。

この人間関係ハンドブックは、このような人間関係の諸現象理解の一助となり、且つは、その問題解決への姿勢とスキルの獲得を意図し、人間関係の調和と利他的行動の解発に寄与しようとするものであり、また日本人間関係学会が企画・運営する「人間関係士」養成を期しての基本的視座と実践的態度の養成をもその目的として作成された資格講座のシラバスを敷衍して著された集大成の書です。

その「人間関係士」資格の設立と運営には、日本人間関係学会を創設された茨木俊夫初代本学会会長、そして人間関係士資格事業の誕生に奔走された佐藤啓子元会長と上原貴夫前会長及び小山 望現理事長の受け継がれた使命感、更には資格制度の確立と運営に取り組んでこられた川村幸夫学会事務局長、山田正明会員、杉本太平資格委員会委員長、三好明夫研修委員会委員長をはじめとする関係学会会員各位の努力の積み重ねであることを記しておきたいと存じます。

然り乍ら、「人間関係士」資格は途なかばにありますので、今後もより魅力と実践性に富む資格内容と制度と
すべく理事会並びに関係委員会で検討され、更に前進していくことと存じますので、会員各位におかれましては
一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

修文大学教授・本学会副理事長 山本克司先生（編集委員）+++++

人間関係士の体系的なテキストが刊行されたことはとても意義深いと思います。

この事業に参加させていただき、衷心より感謝しています。私の担当分野は、「基本的人権の基礎知識」についてです。人間関係の基礎には、関わる全ての人の「個人の尊厳」保障があります。それゆえに、人権の学習を疎かにしては、人間関係士の職務を全うすることはできません。従来人権学習といえば、体験学習の発表が中心でした。人権擁護に関わる様々な人が、それぞれの分野において、体験を発表すること、感情を吐露することは意義があります。しかし、専門職として関わり、クライアントの自己実現を支援するには、法学的な知識に基づいた理論的な人権学習が必要です。この視点から、私の担当個所の「基本的人権の理解」は、執筆されています。人間関係士として人権の理解に必要なポイントは、人権の意義、日本国憲法で保障されている人権の種類・内容、現代社会の中で新しく人権保障が必要になった「新しい人権」の種類・内容、および社会の中での人権調整の理解です。人間関係士にとって基本的人権の学習は、膨大になりますが、人間関係ハンドブックでは、この中で特に大切だと思われる事項についてのみ記述しています。この著書が人間関係士のなくてはならない一冊になることを祈念しています。

日本社会事業大学教授・本学会常任理事 森千佐子先生（編集委員）+++++

「人間関係ハンドブック」が刊行できたことを大変うれしく思っています。本書には人間関係に関する基礎知識と、さまざまな場面における人間関係の実際が論述・報告されています。具体例や実践例も多く、わかりやすい内容になっていると思います。日々の生活の中で、だれもが遭遇し、ちょっと困った、どうしたらよいかわからない、これでよいのだろうか…と感じると思われる場面が取り上げられています。演習課題によって、自分の考え方を確認する機会にもなるのではないのでしょうか。本書が人間関係での悩み解消のヒントになり、さらなる人間関係の発展・実践に役立てていただけたら幸いです。また本書をきっかけに、本学会に関心を持ってくださる方が増えることを願っています。本書の刊行までには、多くの方々のご協力・ご尽力がありました。福村出版の宮下氏、保科氏、榎本氏、そして執筆者の皆様へ心から感謝いたします。

日本人間関係学会 創立25周年記念企画 人間関係に関する多種多様な研究成果の集大成

日本人間関係学会 編

『人間関係ハンドブック』

希薄化が進む現代社会の人間関係。その危機からの回復や人間関係の創造に寄与することが期待されている、日本人間関係学会が認定する「人間関係士」。今後さらに注目が集まる「人間関係士」の資格取得を目指す人に必携の1冊！

内
容

1章 人間関係の基礎・人間関係学諸理論
2章 人間関係の心理
3章 人間関係の発達
4章 教育と人間関係
5章 福祉・医療の分野における人間関係

6章 地域における支援活動
7章 人間関係の改善に関する
 カウンセリング的アプローチ
8章 被災地における人間関係のアプローチ
9章 人間関係士

B5版・並製
280ページ
3,800円＋税

人間関係学探訪シリーズ⑥

日本人間関係学会は教育・医療・心理・福祉など研究者だけでなく、人間関係に関心のある企業人、学生、市民など多種多様な会員が集まっています。そうした会員のお一人おひとりにスポットを当てて、Q&A形式で、その実践やお人柄、人間関係への想いを語っていただき、人間関係学の探究に何らかの示唆を得ることが本シリーズの意図・ねらいです。シリーズの第6回では、甲子園短期大学の早坂三郎先生に語っていただきました。

早坂 三郎 氏



甲子園短期大学学長・教授、甲子園大学・同大学院客員教授、学校法人甲子園学院理事・評議員、法人事務局顧問。一般社団法人日本人間関係学会副理事長・同関西地区会会長、公益財団法人日本高等教育評価機構大学機関別認証評価担当評価員、特定医療法人北勢会評議員、社会福祉法人城見ヶ丘会理事、兵庫県立西宮甲山高等学校学校評議員、大阪府立茨田高等学校全日課程コミュニケーションプロジェクト委員会委員長・同校学校協議会委員、国際経済プロジェクト・スキル&フレンドシップの会アドバイザー、関西演芸推進協議会会員など。

修士（教育学）。人間関係士、全国手話検定試験 5 級。主な研究領域は、産業心理学、特に震災後は社会心理学など。

谷川(広報委員会):こんにちは。早坂三郎先生。昨年 11 月の関西福祉大学での全国大会、また今年 3 月の関西地区会研究会ではお世話になりました。

早坂:こちらこそ、学会及び関西地区会での発表などで、いつもご協力頂き、感謝しております。

谷川:ありがとうございます。さて、早坂先生のご経歴を教えてください。

早坂:芦屋大学大学院教育学研究科教育学専攻博士課程修了、京都大学教育学部教育心理学研修員、芦屋大学・同大学院教授、芦屋女子短期大学学長・教授、芦屋大学名誉教授を経て、大阪府教育委員会教育功労表彰を受け、現職に。

谷川:以前学長をされていたことを私は知っていましたが、4 月から再び学長職に就かれ、その前には、名誉教授、教育功労賞などのご経歴があることについては初耳です。心よりお祝いを申し上げます。それにしましても、そのような先生のご趣味とはいったい何でしょうか。

早坂:スポーツをすることが趣味ですが、7 年前にサッカーの試合でアキレス腱を切断してからは、ジョギングも止め、ひたすら歩くことと階段の上り下りすることを日課として励んでいます。

谷川:怪我による故障を機に、お体を労っておられるのですね。ところで、私は本学会に入会、大会に参加して 10 年というところですが、先生はやはり長いのでしょうか。教えてください。

早坂:資料を探したところ、「人間関係の危機と創造」と題する「1991.1992 年人間関係研究集会報告書」と平成 5（1993）年 11 月の第 1 回大会発表抄録集とプログラム（於：神田外語大学）がありましたので、平成 4（1992）年の人間関係研究集会から参加したと思います。丁度、今年で 25 年目ということになると思います。

谷川:日本人間関係学会は今年で 25 年目を迎えているということですね。ご入会の動機は？

早坂：上原貴夫前会長にお誘い頂き入会しました。最初から黒田淑子事務局長はじめ多くの方々に暖かく迎えて頂き居心地の良さを感じ今日に至っています。

谷川：上原前会長からの勧誘だったんですね。実は私の学会入会当時の会長が上原先生でした。入会して間もなく「学会ニュース」の当時の名物コーナー「北から南から」の執筆の依頼を受けたことがとても印象に残っています。また、黒田淑子先生など歴代の支えてがあってこそ今の学会活動につながっていますね。ありがたいことです。ところで、先生は、本会の関西地区会を長く牽引されています。この研究会のことについて少しご紹介いただけませんか。

早坂：平成 13（2001）年頃から当時の運営委員会の諒承のもと、阿部忠学会地区会長と各地に支部を創るべく、皮切りに関西地区会を立ち上げた次第です。阿部さんは何度も関西に来られて支部創設への相談に乗ってくれました。平成 15（2003）年 10 月の関西地区会発足式には、佐藤啓子元会長はじめ多くの学会執行部の方々にご参加頂きましたことを、感謝を込めて覚えております。爾来、本年 6 月で 54 回目を数えるところとなります。現在では、一人あたり 45 分の研究発表と 15 分の質疑応答で 1 件とし、毎回 3 人の発表で開催しています。

谷川：地区会が歩み始めたお話をうかがって、私自身もこの地区会に初めてお招きいただいたことを懐かしく思いました。続いてですが、先生が主宰あるいは積極的に活動されていることが他にあれば教えて下さい。

早坂：学校協議会委員をしています大阪府立茨田高等学校で「コミュニケーション総合」の授業を 7 年に亘り通年で担当していますが、私だけですと生徒さんに飽きられてしまいますので、桂福團治師匠はじめ関西の著名な方々にもご担当頂き、オムニバス形式にて開講しています。また、ADR（紛争解決）研究会と併せて学校と職場でのピアメディエーションの実践と研究のための「ピアメディエーション教育学会(仮称)」の年内の設立に向けて協力しています。

谷川：先生はさまざまな場所、人、取組内容で多様なネットワークを生かされていますね。冊子やパンフレットなど情報発信、情報提供いただき感謝しております。ところで、本学会には人間関係士という資格があり、7 つの人間関係力を打ち出しています。この 7 つを大事になさっている順番に並べ替えるとうなりますか。

早坂：①自己受容力、②他者受容・共感力、③全体認識・洞察力、④連携・協働力、⑤媒介力、⑥回復・調整・再生力、⑦創造・発展力でしょうか。

谷川：並び替えてみてのご感想はいかがですか。

早坂：どれも大切なのですが、大事な順と言うよりも人間関係の展開過程からして、上述の順と考えました。

谷川：関係の形成プロセスですね。先生と初めてお目にかかったのは今から 10 年近く前になります。その後、学会交流等で、どなたとも分け隔て無く接しておられ、とても気さくで親しみの湧く先生との印象は間違いなかったです。その目に見える思いやりの仕方を私も学ばねばなりません。では、最後にもう 1 つだけ。人間関係、こうすれば良くなりますよという何か提言なり提案はございませんか。

早坂：私は、これまでの経験では思い込みで反応し、コミュニケーションや人間関係に反映させた場合、殆どが後悔する結果になっています。そんなことから、先回りして思い込みを持たないように落ち着いて、出来るだけゆったりと聴き、他者を受容し、共感することに努めたいと願いながらコミュニケーションを図っているつもりです。これは、提案などではなくて、自分への言い聞かせですね。それと、人間関係やコミュニケーションの目的を利他的思考や行動の展開に置くということです。自分の存在や努力が、「ありがとう」という言葉につながれば、お互いに嬉しいし、幸せですよ。

谷川：先生の優しさの中にも強さのあるお話の世界に引き込まれてしまいました。今日は貴重なお話をどうも有り難うございました。

（インタビュー：2017 年 4 月 28 日）

新事務局長ごあいさつ

川村先生から事務局長を引き継ぎました、埼玉学園大学の杉山雅宏でございます。今後学会が少しでも活性化していくように微力ながらお手伝いできればと考えております。今後メーリングリストなどを作成し、会員の皆様への情報発信をスムーズにし、積極的な情報交換が全国の会員の皆様とできればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

杉山雅宏

《事務局便り》

- ✓ **会員状況** (5/25現在)
224名 (内訳：正会員 195名、準会員 27名、賛助会員 2名)
- ✓ **新入会員** (2017/3/4～2017/5/25)
6名 (内訳：正会員 4名、準会員 1名、賛助会員 1名)
- ✓ **新入会員紹介** (順不同・敬称略)
野津 真貴、日本カウンセリングカレッジ、阿部 美幸、前田 美貴、及川 緩子、石黒 慶太
- ✓ **退会者** (2016/3/4～2017/5/25)
3名 (内訳：通常退会者3名、会費未納等による退会者0名)
- ✓ **事務局からのお願い**
事務局が埼玉学園大学に移転しました。住所・連絡先・所属・会員身分等の変更がありましたら、事務局までご連絡ください。
〒333-0831 埼玉県川口市木曽呂1510
埼玉学園大学人間学部心理学科 杉山雅宏研究室
jahrijimukyoku@gmail.com

《全国大会予告》

第25回 日本文学関係学会

大会テーマ
多様性に寛容な社会を目指して
～人間関係力の向上のために～

開催日 **2017年 11月18日(土)～11月19日(日)**

会場 千葉商科大学 (千葉市川市)

基調講演「アクティブラーニングを通じた人間関係」
朝比奈 剛氏 (千葉商科大学 人間社会学部 准教授)

国際学術交流「同一労働同一賃金から考える人間関係」
吳 啟新氏 (台湾・国立中正大学 労働関係学系 副教授)

研究発表、実践発表、ポスター発表
ワークショップ、自主ワークショップ、自主シンポジウム など

大会委員長 勸使河原 隆行 (千葉商科大学 人間社会学部 准教授)

大会事務局 〒272-0827 千葉県市川市国府台1-3-1
千葉商科大学人間社会学部 勸使河原隆行研究室
human-staff@cuc.ac.jp (大会実行委員会アドレス)

学会事務局 〒333-0831 埼玉県川口市木曽呂1510
埼玉学園大学人間学部心理学科 杉山雅宏研究室
jahrijimukyoku@gmail.com

発表申込締切 2017年8月22日(火) 原稿提出締切 2017年9月19日(火)
参加申込締切 2017年9月19日(火) 費用振込締切 2017年9月29日(金)

(編集後記)

第90号という節目に本紙が到達しました。一昨年度、編集長を引き受けてくださった永野典詞先生、そして、私が編集業務に着手したのは6年ほど前からですが、その間、事務局長としてご尽力いただいた川村幸夫先生、それから今回、記事協力いただいたすべての方々に感謝をして御礼申し上げます。(谷川)